2017/9/29　京都大学研修

絶滅危惧植物園、絶滅危惧種保全温室

四季　彩の丘概要

英語名Perennial Garden（意味は宿根草園）。２０１１年7月１日より工事に備えて閉鎖し、2012年6月３０日にリニューアルオープン。面積は5600㎡（旧宿根草園は6600㎡）。１０００種類２０００株を植栽。２０１３年４月には絶滅危惧植物園、チャイニーズガーデン（約1000㎡）、門がオープン。北山通りの賑わいを創出。

１．絶滅危惧植物園

ナルトオウギ

Astragalus sikokianus　　マメ科

韓国と徳島県のみで自生が確認され国内では野生状態では絶滅してしまっている

当園のナルトオウギは平成２０年7月7日に徳島大学薬学部付属薬用植物園から種子で導入されました。長澤園長（当時技術課長）が種子の整理をしている中で発見し平成24年8月31日に播種しました。絶滅危惧種園オープン直後の平成25年６月に植栽され、現在に至ります。国内における公的機関での植物の保有は当園と高知県立牧野植物園、徳島大学薬学部付属薬用植物園のみです。

ムジナモ

Aldrovanda vesiculosa　モウセンゴケ科

1属1種からなる単型属で、日本を含むアジア、オーストラリア、ヨーロッパ、アフリカの日当たりの良い浅い池、沼、川の水たまりの中などに浮遊している水生の食虫植物です。日本では自生地は存在しません。人工栽培でのみ維持されています。当園のムジナモは旧巨椋池由来のもので、30年以上栽培されていた竹谷光二氏から譲受したものを栽培しています。

キブネダイオウ

Rumex nepalenssis Sprenger var. andreanus (Makino)Kitamura　タデ科

絶滅寸前種。1993年には貴船川で絶滅したと考えられていた。2000年時には京都府絶滅寸前種として認定（今後10年以内に絶滅する可能性は50%以上）、環境省のレッドリストでは絶滅危惧１B類（EN）＝近い将来において野生での絶滅の危険性が高いものに認定されている。2003年に465個体あることが確認された。

絶滅危惧種栽培温室について

2015年2月着工、2015年6月30日竣工。面積１５０㎡、最大高さ４．６m。壁面は２．６m
暖房可能、冷房不可。最低温度１５℃。総工費５６００万円

特徴

１純粋製造装置（400万円）及びドライミスト（600万円）

２赤外線カットガラス（400万円）23000円/㎡　普通のガラスは4000円/㎡

３内張りカーテン　ポリビニルアルコールを使った製品。結露しにくく保水するので冷たい水滴が落下して植物が痛むことはありません。保温性が高いので冬場の内張りに利用されます。